

1999年度セミナー概要

フランスボルドーのブドウ栽培とワイン醸造

メルシャン勝沼ワイナリー 斎藤 浩

「良いワインは良いブドウから」という言葉があり、ワイン産地本来の姿は、広大なブドウ畑が必ず存在するという景観を有している。このようにトータルで「ワイン」を見た時、農業であるブドウ栽培とワイン醸造は、決して切り離して考えられるものではない。

ブドウ果の未熟なものを仕込んだ時、出来あがったワインには未熟な香りがどうしても残ってしまう。一方良く熟したブドウ果を仕込んだ時には、心地よいブドウ果由来の果実香がグラスから充分香るものである。このように栽培され、収穫されるブドウ果の品質により、出来上がるワインは多種多彩な顔を見せることになる。つまりブドウ果の質を高めようとする努力は、その果実をとおり、ワインの品質に顕わされることとなる。これにあわせてブドウ樹が育ち、実を結ぶ気候風土も、ワインの性格に多大な影響を及ぼしている。ワイン造りに対して、十分な質を備えたブドウ果を得るためのブドウ栽培について、ボルドー地方で行われている作業とその意味を紹介したいと思う。

まず、「草生栽培」について述べてみよう。この栽培形態は一つの例として写真1に示すような景観となる。一畝毎にイネ科の草種を播種し、ベルト状に草を生やすのである。一畝毎に空いた畝は、肥培管理用として確保しておくのである。この形態で長年続けることも可能であるし、数年毎に畝を変えてみてもかまわない。

ボルドーのアントン・ドウ・メールは、メドックなどの有名産地に比べ、昔からブドウ果の成熟に難しい地域であった。しかし、近年ではこの草生栽培の導入により果実の品質が上がり、それから醸されるワインは品質も向上しているように思われる。

表1. に、地域も栽培品種も異なるが、フランスのコルシカでの結果を示した。品種、地域に関係な



(写真1)

く同じような結果が現れているのは興味深い事である。清耕栽培区と草生栽培区の違いは、まずブドウ樹の剪定重量が変わってくる。同じ畑の中にブドウ以外の植物が同居するわけであり、当然窒素成分等、養分の取り合いがおこる。このためブドウ樹だけで育つより、若干生育は抑制される。しかし、この抑制されて育つ事が結果的に、果実をより熟させることとなり、この果実を実際利用する我々にとっては、好都合となる。表中100粒重という項目がある。これは100粒の重さを量ったものであるが、この重さの軽い方がより小粒であるといえる。つまり、ブドウ果を仕込むとき、果汁の容量に対して果皮の割合の多くなることを意味する。更に果汁の色についても、ワインにしたとき、より濃くなる要素を持った果実が栽培できることを教えてくれる。ここまでの段階で、既に高品質なブドウ果の栽培、収穫が可能になるのではなかろうかと思えるのである。

表1 清耕と草生の違い

	房数/樹	収量/樹 (kg)	1房重 (g)	100粒重 (g)
清耕	20.4	5.88	288	239
草生	18.2	4.43	243	205

(L. BOURDE '99)

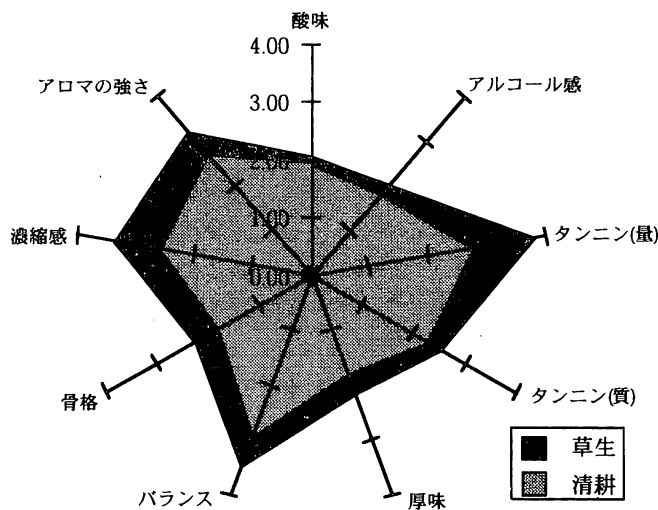


図1. 清耕及び草生区における Nielluccio のりき酒結果 (L. Bourde '99)

次に図1. に、このような栽培をして得られたブドウ果から造られたワインの評価と、対照区から得られたブドウ果からのワイン、それぞれの評価の違いを示した。草生栽培区では、タンニンの質、量ともに優れ、それが寄与するワインの骨格や口中で感じる厚みが増している。そしてアロマの強さ、香りについては図2. を見ていただきたい。香りの強さ、質、そしてその香りは果実香がより強く表現されるものとなる。果実香と言ってもその中にはいろいろなイメージが存在する。ブドウの果実がベレーゾン期を迎え、色着き始め、まず淡赤色から赤色へとかわっていく。更に果実が成熟していき、やがて赤紫色から黒紫色へと変化していくのと同じように、ブ

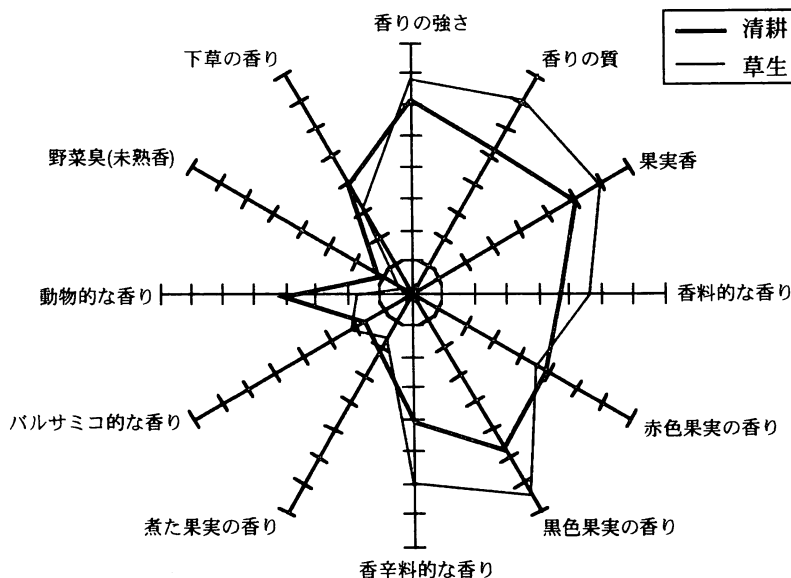


図2. 清耕及び草生区における Nielluccio のりき酒結果 (L. Bourde '99).

ドウ果から醸されるワインに感じられる果実香は、熟していけば行くほど黒い果実をイメージする香りになっていくものである。

よく熟した果実から醸される果実香とは反対に、未熟な果実を連想させる香りとはどのような香りなのだろうか。グラフの中に野菜香という項目がある。ベレーゾン期以降果粒の着色が始まる以前、まだ蒼い状態の果実は決してフルーティーな香りを持ち合わせてはいない。非常に青臭く、野菜に相通ずる香りがある。つまり、これが未熟香なのである。

ブドウの生長は萌芽から開花結実期をとおり、ベレーゾン期に至る伸長・肥大成長と、この時期以降果実が充実する生殖成長の二つがある。この二つの生育期間を通じ、土壌の水分や養分が豊富に存在すると、ブドウはその成長の内、伸長・肥大成長に終始する傾向がある。我々はこのような成長をしたブドウ樹を徒長した。と呼ぶ。字のとおり正に徒に伸びてしまうのである。このように徒長したブドウ樹は決して充実した果実など与えてはくれない。ならばよく熟した果実を手に入れるため、何をしなければいけないのだろうか。当然肥培管理を確実にして余分な肥料分は施してはいけない。草生栽培は同じブドウ畑の中で、他の植物と競争させる事により水分や、養分を必要以上吸収できない状態を作り出すのである。生育期間を通じ土中の硝酸態窒素の量は明らかに草生栽培区で少なく、これが一種のストレスになっているのである。更に少量の降雨等、畑中の草による蒸散作用で速やかに空気中へ運び出されるのである。これにより土中の水分についてもストレスが発生するのである。

次に除葉について述べよう。ここで言う除葉とは、太陽光を遮る葉を幼果期の頃取り除き、果房に充分光が当たるよう、房周りの環境を整える作業を指す。また、ただ単に葉を取り除くことだけに止まらず、果房上位の副梢をも切除する事を言う。この作業は経験的に旧大陸や、日本の甲州ブドウを栽培している地域で

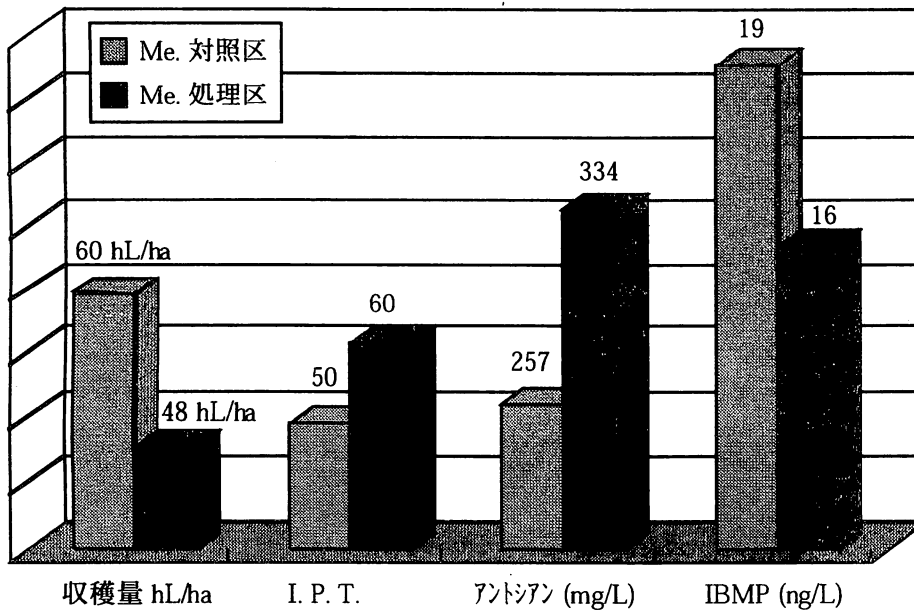


図3. メルローに於ける処理効果.

過去から行われていた。甲州ブドウが色着きを始める頃、その果房の上に太陽光を遮っている葉を取り除くと、より鮮やかに着色した果実が収穫できることは、土地の古老から何度となく聞かされたことがある。現在では我々の作業暦の中に、当然の作業として書き込んである。

更に生育期間中、数回に及ぶ摘心作業、そしてベレーゾン期に行われる摘房作業など、人手を投入しての作業は数限りなく存在し、確実に実行されている。この様子を図3. に示した。今まで述べてきた各作業を確実に実行した区と、対照区の違いである。ブドウの生育期間を通し、各ポイントで人間が作用した結果がよく現れている。良いワインを造ろうとして、良いブドウを栽培、収穫するのだという人達の意志が充分読みとれる結果となっている。フランス語でテロワールという言葉、日本語で気候風土と訳す。しかし、ただ単にその土地の気候と土壌の織りなす産物のみでは決してない。そこに必ずや人間の、しかも志を十分に持った人の要素が加味されるのである。ブドウを栽培し、ワインを醸造している人達に、少しでも参考にしていただけたら幸いである。

参考文献

L. BOURDE, A. BAGARD, G. SALVA, N. USCIDDA, D. VALLEE, C. LAVERGNE, M.-J. SERPENTINI, M. ALBERTINI. Interet de

l'enherbement naturel maitrise et influence d'une concurrence limitee de l'herbe sur la production et la qualite des vins. Revue Francaise D'oenologie No. 179: 16-19 (1999).